

第11回生活困窮者問題シンポジウム

「ひきこもりから私たちの未来を考える」

令和5年9月3日（日）

シンポジウム

司会進行

三重県子ども・福祉部地域共生社会推進課監 葛山 氏

パネリスト

いなべ笑かどサロン世話人	鈴木 洋子 氏
伊勢志摩不登校ひきこもりを考える会世話人	濱口 拓 氏
伊勢市健康福祉部福祉総合支援センターよりそいセンター長補佐	小川 直紀 氏
伊勢市ひきこもり地域支援センターつむぎセンター長	竹澤 尚美 氏
一般社団法人ひきこもりUX会議代表理事	林 恭子 氏

葛山 コーディネーターは佛教大学社会福祉学部准教授、長友薫輝様にお願いする予定でしたが、本日体調不良により急きょご欠席されることとなりましたので、司会進行につきましては、三重県子ども・福祉部地域共生社会推進監の葛山が務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

今回、当事者視点に立つということと地域社会のあり方という二本柱でこのシンポジウム全体を進めさせていただきたいと思っております。最初に、皆さん、本当にひきこもり支援についていつも現場でいろいろな思いをされて、いろいろな取り組みをされている方々ばかりですので、自己紹介も含めまして、皆さんにお一人おひとり、当事者、家族に寄り添うひきこもり支援についてお話しさせていただきたいと思っております。はじめにいなべ笑かどサロン世話人の鈴木さんのほうからお話しいただけますでしょうか。よろしくお願いいたします。

鈴木 こんにちは。いなべ笑かどサロン世話人をしております鈴木と申します。いなべ笑かどには世話人が3人おまして、その中の一人、今日は代表して私が参加させていただきました。

笑かどサロンですが、「笑う門には福来たる」から取りまして、笑かどサロンとなっております。当事者の親さんとか当事者さん、当事者OBの方はどうしても家でいろいろ考えて悩んでいることが多い。ただ、この会、サロンに参加しているときは、ちょっと短い2時間ですが、笑って、ときには泣いたり、怒ったりということもあるかとは思いますが、楽しいひとときを過ごして、元気になってお家に帰っていただくことを目標に活動しております。

支援するというかたちではもちろんなくて、当事者の会ですので、互いに支え合って悩みを共有するという会になっています。ひきこもり支援センター瑠璃庵さんのご協力をいただき、場所を提供していただいています。瑠璃庵の支援者の方も必ず毎回参加していただいて、当事者の気持ち、親の気持ち、当事者OBの気持ちを一緒に聞いていただいて、とてもありがたい会になっております。よろしくお願いいたします。

葛山 ありがとうございます。続きまして、伊勢志摩不登校ひきこもりを考える会世話人の濱口さん、よろしくお願いいたします。

濱口 こんにちは。伊勢志摩不登校ひきこもりを考える会の濱口です。もともとは2000年ぐらいですか、三重県のほうで各地の父母会を集めて「三重県登校拒否不登校ひきこもりを考える会」というのをつくるときに、「あんたもおいない」ということで引っ張り出さ

れました。というのは、フレネ教育というオルタナティブ教育系の全国委員もしていただき、一応、不登校関係の学習支援に対してそれなりにやれることがありましたので、その関係で引っ張り出されたんですが、そのあと「志摩にもつくってよ」という話になって、志摩にすぐにつくるかたちになり、伊勢とも連携してということで現在に至っています。

志摩の会のほうは毎月第3日曜の夜、伊勢の会は奇数月の第3土曜の夜、定期的開催しています。というのは、やっぱり家族の皆さんも孤立しがちで、「よし行こう」という気になるのが大変なんですね。うちの会ももう20年ぐらいになりますので、ときどき中日新聞さんの伊勢志摩版でちらっと「あるよ」ということを載せていただいたりすることがあるんですけども、「それを見て思ったんだけど、来るまでに1年かかってしまった」という方もいました。私、伊勢、鳥羽、志摩18校の小中高で非常勤講師とかをしている経験がありますので、その当時教えていた教え子が「先生の名前だったら行こうかな」という感じで来たり、ということもありました。そういう意味では、マスコミの皆さんも何人かみえています、そういうイベントがあるよということを地域版だけでも知らせていただけるだけで大変助かります。

家族会ですが、当事者の居場所ではなくて、こちらは家族の居場所をつくる、家族を孤立させないということが基本的にはメインになります。たとえば「こういうことはしないでください」「こういうことをやってください」と言われても、できる親御さんや家族ばかりではないんですよ。

たとえば三重県のほうの会を開いたときにあるお母さんが言いました。「ひきこもりになったので、その期間の教科書を全部子どもの机の前に並べました」。これは当事者からすれば大変なプレッシャーというか槍になるのですが、そのことはお母さんの正直な気持ちでもある。ただ、私はそのときに、「お母さん、それ自分ではできますか」という話をしたんですよ。そうしたら、「あっ、できない」ということに気づいた。

普通のように戻ってもらいたいという気持ちはあるけれども、じゃあ、普通が正しいのかということも考えるきっかけになる。そして、家族にとっての居場所になる。それによって、子どもたちの家庭での環境を変えていこうというのが家族会です。やれることをやれる範囲で。一人がみんな背負い込むことはない、続けられることをやれる範囲で続けていく。それがやっぱり大きな力になると思います。

気づいたからといって、すぐにそのとおりのことをできるわけではありません。5年、10年という年月がかかることだってざらです。でも、続けるということがすごく大きな意

味を持っているので、そここのところの支援ができるようにということで家族会を続けています。

葛山 ありがとうございます。家族会のことについてお二人からいろいろお話しいただきました。続きまして、今日お配りしたパンフレットの中に、伊勢市の健康福祉ステーションとつむぎというパンフレットを入れさせていただいていますが、実際そこで活動されています、伊勢市健康福祉部のよりそいセンター長補佐の小川さんと、伊勢市のひきこもり地域支援センターつむぎのセンター長をされています竹澤さんに、伊勢市の取り組みについてお話ししたいと思います。お願いします。

「伊勢市健康福祉ステーション」紹介

小川氏

伊勢市におけるひきこもりの応援については、このあと伊勢市社会福祉協議会の竹澤さんから報告いただきます。その後、後半部分で、ひきこもりの応援を含めた孤独・孤立対策について私のほうから説明をさせていただきますので、ここでは自己紹介を兼ねて、今年の5月8日に伊勢市の駅前にできたMiraISE（ミライセ）の5～7階に開設した伊勢市健康福祉ステーションをご紹介します。青色のパンフレットをご覧ください。

最初に私が所属している福祉総合支援センターのよりそいです。福祉の総合相談、何でも相談をはじめ、高齢・障がい・子どもの虐待対応であったり、地域福祉の推進など幅広く担当しています。困りごとがたくさんあってどこに相談していいかわからないという場合はよりそいのほうにご相談ください。LINEでの相談も受け付けております。

次に6階のママ☆ほっとテラスです。妊娠中、産後の保護者の方が気軽に立ち寄って、保健師さんや助産師さんに相談できる場所になっております。

次が駅前の子育て支援センターですね。キッズ☆もっとテラスといいます。親子で楽しめる交流ひろばがありますが、三重県初の大型遊具を取り入れております。

次に駅前の一時保育室になっております。一時保育室は、仕事や急病で保育が困難な場合にお子さんを半日、1日の利用時間で保育するところになっています。

次が子ども発達支援室です。子どもの発達に関する相談窓口として、18歳までの子どもを対象に育ちや発達に関する助言を行っております。

最後に中央保健センターになります。子どもから高齢者まで全世代を通じた健康づくりを支援しています。

以上で健康福祉ステーションと私の自己紹介を終わりたいと思います。

「伊勢市におけるひきこもり応援」

竹澤氏

続きまして、伊勢市ひきこもり地域支援センターつむぎの竹澤です。私のほうから取り組みを通して自己紹介もしていきたいと思います。

私たちのひきこもり応援のこれまでですが、平成 29 年 4 月に伊勢市生活サポートセンターあゆみを開設することから始まりました。あゆみは、生活困窮者自立相談支援機関と総合相談窓口とし、伊勢市と伊勢市社会福祉協議会とで開設し、その中でひきこもりの方の相談対応も始めました。そこから 6 年、さまざまな相談の中の一つとしてではなかなか十分な応援はできない、もっと一人ひとりに合った応援ができるようにしたいということで、お隣にいる伊勢市の小川さんたちとも話し合い、令和 5 年 4 月、伊勢市ひきこもり地域支援センターつむぎの開設となりました。これは、先ほどの林先生のお話でもあったように、ひきこもりの窓口をわかりやすくするためでもあります。

では、取り組みから私たちの応援の内容を知ってもらえたらと思います。一つ目にフリースペースこだまです。こころに不安のある方とそのご家族が自由に集える場です。対象者はこころに不安を抱えた方とそのご家族で、ひきこもりの方に限定しているわけではありません。月 10 回ほど開催し、開催場所は私たちがいる伊勢市福祉健康センターと、伊勢市社会福祉協議会のサテライトがあるイオンタウン伊勢ララパークげんこころ一むでも行っております。

フリースペースこだまの参加状況ですが、現在登録者は 20 名、男性 6 名、女性 14 名の参加となり、年代はご覧のとおりで、毎回平均 4 名ほどの方が参加しておられます。

こちらがフリースペースこだまの様子です。左の折り紙を持っている方と奥の水色の服の方はひきこもりサポーターさんです。私たち職員だけでは、到底お一人おひとりに合った応援はできないため、令和 2 年度からひきこもりサポーター養成を始め、サポーターの方々にも一緒に応援してもらっています。平日のこだまは読書や塗り絵、脳トレや参加者やサポーターとのおしゃべりなど、それぞれが好きなことをして過ごしています。最近は職員から「スクラッチアートというのがおもしろいよ」と寄付してもらってから、スクラッチアートにはまっている利用者さんも多いです。

また、写真はありますが、社会福祉協議会の就労支援施設にあったさをり織機を見た

サポーターさんが「私、これできるよ」と言ってくださり、参加者がサポーターさんに教えてもらい、さをり織りをすることもあります。ちなみに、つむぎの職員は誰一人としてさをり織機は触ったこともありませんし、さをり織りもできません。

右側は日曜日のこだまですが、こちらは皆で創作活動を行っています。これは風鈴づくりの様子です。先月は苔玉づくりを行いました。

続いて中間的就労事業ほっぷです。働きづらさを抱えた方の就労体験の場です。その人その人に応じたプログラムをつくって応援しています。登録状況は、いま現在登録者 16 名、男性 6 名、女性 10 名。年代も 10 代から 50 代と幅広いですが、現在は 30 代の方が 6 名と一番多く、最近なぜか若い方の登録が増えてきているような状況です。

こちらは中間的就労事業ほっぷを説明するためにつくったものです。働きたいという思いから、そこから戻ったり、休んだりすることにもときには必要。私たちはあくまでもご本人の働きたいという思いに応えるためにこの事業を行っているので、就労というゴールのためにしているわけではありません。そのため、この図でもわかるように「ゴール」ではなく「つづく」の表記になっています。ちなみにこの図とつむぎのリーフレットをつくってくださったのも同じグラフィックデザイナーさんで、この方も私たちの応援団の一人です。

こちらが中間的就労事業ほっぷで内職をしている様子です。作業もちろん大事ですが、ここでのコミュニケーションも私たちは大事にしています。天気や体調、趣味、先ほどのお話にもあったように時事問題の話、ときにはサポーターさんの悩みを利用者さんが聞いてくれたりします。ある男性サポーターさんは、ご自身と娘さんとの関係がうまくいっていないときに、ほっぷでその話をされ、娘さんぐらいの年齢の利用者さんからアドバイスをもらって助けられたそうです。

ここでの会話で、「あっ、この人はこんな思いをされていたんだ」とか、「そんな趣味があったんだ」ということもいっぱい気づきがあり、驚くことがいっぱいです。先日も大雨が降ったんですが、そのときに靴がグショグショになっている利用者さんを、別の利用者さんが「こうすると早く乾きますよ」と言って、靴の中に新聞紙を詰めてくださったそうで、そういうコミュニケーションができる場ともなっています。

こちらほっぷの中でパソコン教室や調理実習をしている様子です。最近パソコン教室は人気で、ほっぷの利用者さん、たくさんの方が参加されています。右側の調理実習は、皆さん、おうちで料理をされたことがない、ご家族の手伝いもしたいけど何もできないと

いう方もいらっしゃる。私たちはなかなかできないので、先生になってくださるのもサポーターさんで、まずは簡単なものからということで、1回目は卵焼きとお味噌汁、2回目はハンバーグづくりをしました。

そういえば調理実習ではないのですが、明日は一人のサポーターさんがおうちで採れたジャガイモを寄付してくださり、そのジャガイモを使ってなにかしようということになりました。最初は、ジャガイモだから簡単にジャガバターとかフライドポテトはどうかと言っていたんですが、調理師として働いているサポーターさんもいらっしゃるなので、その方に「何をつくったらいいかな」と相談したところ、「コロッケはどうやろう」と言われました。ただ、コロッケはハードルが高いなということで、ジャガバターとコロッケの間を取って、明日は皆さんでカレーづくりをしようと思っています。そんなふうにサポーターさんにも利用者さんにもいろいろご意見を聞きながらやりたいことをやっています。

こちらが中間的就労事業ほっぷの中での職場体験の様子です。農業や飲料販売、福祉などいろいろな体験を行っています。ある利用者さんは、左の農業、AC farm さんというところなんですけれども、そちらでの農業体験を通じて、「やっぱり自分にはこうやって体を動かす仕事がいいんだな」ということを言われて、農業をされている就労支援施設につながりました。

真ん中のフローナルさんに「この体験を受けてもらってどうですか」ということをお聞きしたところ、手紙をいただいたので、今日は紹介させていただきたいと思います。

「6月から弊社商品の検品業務をご協力いただいております。作業当初から意欲的に取り組んでいただき、迅速、丁寧な対応で助けていただき大変感謝しております。弊社での経験に自信を持っていただき、さらなるステップアップにつなげていただけたらと思います。また、まだまだ自信のない方も、見学だけでも可能ですのでぜひ一度お声がけください」。そういったお手紙をいただき、皆さんがやっている体験が事業者さんも「よかった。助かったよ」と言ってくださることが私たちの励みにもなっています。

こちらは住民主体のデイサービス、ホームタウン南本町さんでのスタッフ体験の様子です。最初行かせてもらったときにはお互いに「どう接したらいいんだろう」とぎこちなさもありましたが、2回目には「待ってったよ」と温かく迎えてくださり、皆が笑顔になりました。20代女性の利用者さんからは、「行く先の人は皆優しいから、緊張はするけど行けるし、行きたいと思います。これからも続けていきたいです」というお声をいただいています。

現在、就労体験の登録企業は 13 社、スタッフ体験の登録の集いの場は 3 件となっています。これらは、社会福祉協議会の地域福祉係をはじめ、生活支援コーディネーターやボランティアセンター、就労支援を行う NPO 団体さんなどの協力を得て開拓しています。これぞ社会福祉協議会の強みだと思ってやっております。

続いて、ひきこもりの家族の交流会です。こちらは家族同士で日々の思いを共有し、息抜きする場として、2 カ月に 1 回開催しております。参加状況はご覧のとおりです。

こちらがひきこもりの家族の交流会の様子です。最初はひきこもりの対象者の年齢別にグループになって話していたんですが、「ほかの方の話も聞きたい」との声から、皆で話すようになりました。また、ご家族から「こんなことを知りたい」「ひきこもり経験者のお話を聞きたい」などの意見をもらい、それらを取り入れた内容で実施しています。

右側は、こころの健康センターの楠本先生に来ていただいたときの写真になっております。今回 9 月は臨床心理士さんをお招きしての交流会を実施しています。この臨床心理士さんは前回の交流会にも遊びに来てくださり、本当に私たちの応援団の一員だと勝手に私たちは思っています。

こちらが飛翔者会よりみちのチラシです。飛翔者会って何だろうと思われた方があるかと思います。飛翔者会は何かといいますと、以前ある人から「当事者という言葉は何かマイナスイメージがあって使いたくないな」と言われたことがあります。確かにそれを考えると、事故の当事者とか、事件の当事者とか、ちょっとマイナスイメージがある。じゃあ、自分たちで当事者に代わる言葉をつくらうということで、来てくださっている参加者の方にどんな名前にしようかということ相談したら、いくつか案を挙げていただきました。向上者とか超越者、躍進者、いくつかの案を挙げていただいたんですけども、その中から「可能性を秘めた人。どこにでも飛べる」というところで「飛翔者」という名前になりました。「よりみち」という名前も、「いつでもふらっと寄ってもらえる」「近道だけが正解ではない。長い人生において寄り道することも大切」という、参加者の皆さんで決めていただいた名前です。

ちなみにこのチラシも参加者の方々につくっていただきました。このウサギとクマの絵もある一人の女の子が作ってくれて、もっと可愛いバージョンとかいろいろあったんですけども、「幅広い年齢にもいけるようにちょっと渋めのクマとウサギでお願いします」とか、いろいろな注文をつけてつくっていただいた絵です。よりみちが描かれている枠組みのほうもまた違う方が作ってくくださり、それを合わせて一つのチラシとなりました。

した。

こちらが飛翔者会よりみちの様子です。先ほどのチラシにも出てきたように、ブロックスというボードゲームやトランプをしている様子です。

続いて個別支援です。こちらはその人その人に合った支援をしています。この写真は左が体力づくりで、サポーターさんと一緒にウォーキングをする写真です。

右側はサポーターさんと勉強をしている様子です。この右側が利用者さんで、その女の子もまずはお母さんとの面談から始まったんですが、次にお母さんとご本人さんで私たちの下に来所してくださいました。数カ月後にやっと、「自分は小学校 5 年生から不登校だったので、ずっと勉強していない。だから勉強がしたいです」。そういう「したい」という思いを言ってくださり、いまは学習支援やパソコン教室、職場体験にも参加しています。

公共交通機関を使ったことがないということで、サポーターさんと一緒に電車に乗る練習をしている様子になります。いままではお母さんが車で送ってくださってきていたのですが、このように本人さんに合った支援をしております。その他、免許の更新の付き添いや病院への付き添い、メイク教室なども行っております。

最後になりますが、これは職員とひきこもりサポーターさんで撮った写真です。4～5 日前のサポーター意見交換会の際の写真で、ちょうど、今日いらっしゃるひきこもり UX 会議の林先生のところの研修に参加していたため、一人うちの職員がいません。その他サポーターさんも 30 人いるうちの何人かなんですが、これが私たちの応援団です。ほかにも社協の他部署、行政、他機関、さまざまな方が応援チームに加わってくれています。これからも皆で応援をしていきたいのでよろしくお願いします。

葛山 ありがとうございました。ご家族の方、また支援者の方、それぞれいまの取り組みをお話しいただいたんですが、林さんのほうから一言。

林 ありがとうございます。いろいろな取り組みをやっていらっしゃるなということが本当によくわかりました。

葛山 そうですね。小川さん、竹澤さん、実際支援をされていて、今日もたくさん支援者の方が来ていただいているので、自分も悩まれたことや困っているなというところ、平成 29 年から取り組みを始められて本当にいろいろなことを悩みながら現在このかたちになってきて、これからまたいろいろな声を聞きながら進化を続けられると思うんですが、いままで悩まれたこととか、そういうのがあれば。たぶん、ここにみえる支援者の方もきっと同じ気持ちを持っている方が多いと思いますが、そのあたりいかがですか。

竹澤 悩みは常にあって、何が正解で何が正解でないか、本当にわからない中、最近では、先ほどのパワーポイントも「応援」という言葉を使っていたのですが、私たちのひきこもりサポーター養成講座のときに先生になってくださる就労支援の団体さんも「応援」という言葉を使っていて、もう「支援」という言葉が恐くて使えない。支える自信がないと言ってしまったらだめなんです、私一人ができなくても、寄り添いたい、何かしたいと思えるみんながいたらできることがたくさんあるのかなという事は思っています。でも、やっぱりひきこもりに対する正しい理解がない部分もちろんあって、そういう理解をどういうふうに広めていけばいいのかなという事は常に思っていることです。

もう一つは、1 回も会ったことのない人の応援を考えると、私たちはスーパーマンでもエスパーでもない、何回も訪問しても会えなかったり、何年も会えない方もみえたりする。そういうときにどういうふうな応援、応援の入口がどこになるかわからないのが、こちら心折れそうになる瞬間ではあります。

葛山 思えばこそというところが本当にあるかと思うんですが、小川さんの方はいかがですか。

小川 市の窓口であったり、つむぎの窓口で、勇気を振り絞ってご家族の方が相談にみえて、私どももお声をちゃんと聞きながら、ご本人に会うための支援、応援を考えると、当然ご本人にはなかなか会えませんし、ご家族もだんだん「あんたら来てもらっても申し訳ない。会えへんでもうええわ」というふうな諦めも入ってきたりもします。ご家族とはつながり続けたいんですけども、ご家族がちょっとギブアップしかけたときに私どもがどうやってつながり続けたいのか、どんなお声をかけたらいいのかというのは常々悩むところです。

林 何かお二人ありますか。

葛山 そうですね。鈴木さん、こういうふうに支援の側も悩んでいるところがあると思

いますが、「こうしてもらったらもっとつながれるのにな」と感じられたときとか、「こういうところを配慮してもらえるとすごくありがたい」という部分もあるかと思います。そのあたりのお気持ちとか教えていただいてもいいですか。

鈴木 支援なんですけど、本人さんがいまそういう状態にあるかどうかというところではあるかと思うんです。うちの状況でいうと、中学校のときに不登校になって、担任の先生が通ってきてくださったんですが、インターホン越しに「出ておいで」と言うのとか、あと電話攻撃がありまして、そのあと電話に一切出られなくなりました。あと、玄関に人がいると恐怖を感じるようになったということもあって、親としてもそれを見ていると、どこが正しくて、どこがどうなのかというのは……。

いま見ていて思ったんですけど、今日林さんの講演を聴かせていただいて、うちの娘、息子と林さんが経験されたことはほぼ同じなのではないかと思っています。本当に土の中を這うように、同じ景色を何度も何度も見ながら、どうして学校に行けなくなったんだろう、どうして高校も行けなかったんだろう、どうして大学も辞めてしまったんだろうというところで、ぐるぐるぐるぐる同じところを見ながら悩み苦しんでいるところであると思います。

ただ、私が親としてできることを私はしている。というところちょっと変なんですけど、娘に聞くと、親が泣いていたり、悩んでいたりする姿はやっぱり見たくないらしく、自分が家にいること、学校に行けないことがこんなに親を苦しめるんだと、さらに本人を苦しめることにつながってしまう。それを娘から聞いたときに、私は私の残された人生も限られているし、親は親としての人生を楽しむ姿を子どもに見せてあげることだと思っています。

私がいま社会とつながる接点になっているので、親の会をしていることはもちろん子どもも知っているし、親の会を通して知り合いになった人たちの話を家でする。そうすると、娘は否定的な言い方をするときもあるんですけど、やっぱり親がそうやって誰かとつながって楽しく過ごしているということは、本人にとってはプラスになるのではないかと私は思っています。支援者さんの方たちのお気持ちと、当事者さんのいまのタイミングとかいまの状態が合っていれば、支援がうまくいくであろうし、いまそこまでの状態になっていなければ、やっぱり支援の方とつながるのもなかなか難しいこともあるのではないかと思います。

林 私からもいまのお二方からのご質問も含めてお話をしたいと思います。

葛山 ありがとうございます。先ほど家族会の重要性ということと、地域のさまざまなところとつながることの重要性を林さんから話しいただいたんですが、家族会を実際運営されている濱口さんから、家族会運営にあたって心がけてみえることとかがあれば話しいただきたいのと、こだまとか、ほっぷとか、さまざまなつなぎ先を運営されている竹澤さんから、地域とのつながりというところで、地域といろいろなかたちでつながってみえると思いますが、そういったことの重要性を順番にお話しいただけませんでしょうか。

濱口 課題がたくさんあって、困ったな、宿題いっぱいと思ったんですけども。

一つはいま津の会、元私の所属していました三重県不登校ひきこもりを考える会の関係者もみえていますが、そこに行っていたときに、深刻な話もワーッと出るけれど、必ずその話の中、対話の中で笑顔が出るということは一つ、私自身は気にしていました。そういうことで、その場がお父さんやお母さん、おじいさんたちにとって居場所になるということですね。

本人たちも居場所があると動きやすいし、元気ももらえるけれども、家族会というのは家族にとって安心してしゃべれる居場所なんですね。志摩の会でも、鳥羽志摩の精神障がい者の親の会のリーダーがひょこっとやってきて、息子さんのことではなくて会の運営の話を一バーツとして、悩みも言って帰っていったりもしていました。別に悩みだけではなくて、まずはそれぞれの人の居場所になればいいのではないかということです。

それから、私たちは神様でも超人でもないのです、結局やれることというのは、それぞれの得意・不得意はあるにしる限られた存在です。だから、無理をせずに続けられることを続けていける支援、援助、伴走ということが大事になるのではないかと思います。

もう一つ大切になるのが、本人の現実、家族の現実をしっかりとつかむことと、必要な知識はなるべくたくさん仕入れ続けるというか、勉強し続けるということも大事なのではないかと思います。家族の方が断るといような状況のときは、アプローチの仕方がそのご家族のいまの現実に合わせていないのではないかということで、アプローチの仕方、あるいはちょっとした話の仕方によって変わってくる場合も当然あります。でも、通う側が無理をしたら通う側がつぶれてしまっただけで続かない。そうすると、新しい人がまた一から関係をつくり直さなければいけないということになる。通う側、支える側も人間ですから、自分のできる範囲で続けられるということがすごく大事なのではないかと思います。

よく親の会で言っていたことは、「アクシデントはきっかけになる。だけど、イベントをつくってもなかなか本人たちは乗ってこないよ」という話でした。お母さんが手術をしたとか、そういうちょっとしたことが変わるきっかけになったりもしますけれども、こうなるように、こうなるようにといっぱい準備しても結局空振りになることは多いので、日常的にそれぞれの人に安心できる場、居場所をつくり維持していく。そういうことを重ねて、その居場所をなるべくたくさんつくっていったらいいのかなと思います。

葛山 ありがとうございます。そうしたら竹澤さん、地域のつながりのことについてちょっとお話しいただけますか。

竹澤 先ほど林先生のほうから、「自立とは助けてと言えること」というお話があったと

と思いますが、私たちは社会福祉協議会ですので、私たちが何かをするというよりかは、地域の方に「こういう課題があるから、こういう課題に対して助けてほしいんだ」と言う仕事だと思っています。

今回、このひきこもり地域支援センター「つむぎ」という名前なのですが、どんな名前がいいかなというのを行政と私たち社会福祉協議会で考えたときに、いろいろな関係性をつむいでいく、人の思いをつむいでいく、または人と人をつむいでいく、そういう意味を込めて「つむぎ」という名前をつけました。

先ほども申し上げたとおり、一人でできることなんてたかが知れています。だけど、こういうことを一緒に解決したいと思ってくださる方に、「いまこういうことに困っているよ」「伊勢市はこんな課題があるんだよ」「いま社会でこんな問題が起こっているよ」と発信すること、そこに対して「助けて」と言えることが大切で、そこからいろいろな理解が深まっていくのだなと思っています。先ほどおっしゃったプラットフォームづくりもそうですが、そういうところに力を入れて、恥を忍んでではなく前向きに進んでいくために「助けて」とみんなで言っていかななくてはいけないかなということはすごく思っています。プラットフォームについては小川さんから詳しく説明していただけたと思います。

葛山 そういったさまざまな「助けて」という声をつむいでいくことでいろいろな支援、いろいろなかたちの寄り添った支援につながっていくかと思いますが、伊勢市さんの重層的な取り組み、断らない相談支援をされているということで、小川さんから説明してもらってもよろしいですか。

小川 では私のほうから、ひきこもり応援を含む孤独・孤立対策について伊勢市の取り組みをご紹介しますと思います。先ほど竹澤さんからひきこもり応援について説明がありましたが、10月にはひきこもり支援者向けの研修会も予定をしておりますので、またご紹介していきたいと思っております。

つむぎとか、サポーターさんとか、さまざまな方々の応援で一步一步前に進んで、ときには休憩したり、半歩下がったりもしますけれども、そういった失敗を恐れずに何度もチャレンジできる仕組みづくりとして、働きたいと思っている一人ひとりに合わせたオーダーメイドの支援というのを、これから検討していきたいと考えております。

こちらが林先生のおっしゃっていたプラットフォーム、直接的ではないですが、伊勢市として孤独・孤立に悩む方に迅速に支援を届けるために、福祉分野に限らずさまざまな団体の方と連携をしていくというかたちで、去年、このプラットフォームをつくりました。

去年、内閣官房のモデル事業があつて、手上げをしまして、取り組み団体として採用されました。全国で 29 自治体ですが、伊勢市は、働きたいと思っている方々の働きづらさを抱えた方に対する支援ということで、どのようなことができるのかという会議体としてのプラットフォームをつくりました。

これが 29 の自治体です。三重県では伊勢市と名張市が実施をしました。

こちらが、働きづらさを抱えた人がどのような状態を指すのかというイメージ図になっています。一概に働きづらさといっても理由も背景もそれぞれですし、働くといっても、働き方も人それぞれですので、一步踏み出したいと思ったときに、その一步が踏み出しやすい伊勢市でありたいと思っております。

あくまでも推計ですが、働きたくても働けない人、伊勢市でだいたい 4000 人いるとされています。その中でひきこもり状態にある方は、内閣府の調査を基に推計すると、伊勢市でだいたい 1400 人ぐらいいるのではないかとわれています。隣に竹澤さんがいらっしゃいますが、伊勢市社会福祉協議会が令和 4 年度にアンケート調査をしましたら、ひきこもり状態にある人は、疑いを含めて市内に 130 人ぐらいいるだろうという結果が出ました。このあと民生委員の皆様にご協力いただき追跡調査を実施していますが、さらなる把握方法について検討していきたいと考えております。

プラットフォームでは、周知・啓発、社会参加、就労支援という三本柱で何ができるか検討していきたいと考えています。社会に一步踏み出すきっかけとして、企業さんや地域の団体さんが、ボランティア活動や集いの場というのをされておりますので、そこのお手伝いとか活動体験ができるように、先ほど竹澤さんからもお話がありましたが、どんどん協力を依頼していきたいと考えています。

また、その先のステップアップとして職場見学とか就労体験、働くことが必ずしもゴールではないのですが、実感できるような取り組みを進めるためにも、企業さんにもご協力を依頼しますし、伊勢市としてもそういうふうな見学、体験を受け入れていきたいと考えています。

また、社会参加、就労支援についても、いまは ICT の活用も求められていますので、オンラインサロンや在宅ワーク、そういった検討であったり、1 日 1 時間とか、そういった短時間雇用についても企業さん等々にもご依頼していきたいと考えています。

最後になりますが、そういうふうな孤独・孤立対策を具体的に進めていくために、令和 5 年度に「いせ就労チャレンジ☆カフェ」というのを NPO 法人いせコンビニネットさん

に委託をして設置しました。就労のきっかけづくりとして、先ほどご説明したボランティア体験、職場見学、就労体験の実施とか受け入れ先の開拓、短時間雇用の理解促進等々をお願いしていきたいと思っておりますし、つむぎとも連携しながら進めていきたいと考えています。この事業は利用に関して年齢制限もありませんし、いきなり就労することをゴールに設定することもありますので、気軽にご相談いただきたいと思いますと思っております。

このほか、伊勢市の孤独・孤立対策については、市のホームページに専用ページをつくっていますので、またご覧になっていただきたいと思います。以上で伊勢市の取り組みを終わります。ありがとうございました。

葛山 ありがとうございます。このようにひきこもり支援、これからも重層的支援ですとか、家族会、当事者会、いろいろな取り組みがどんどん進んでいくかと思えます。どうぞ支援者の皆様、当事者の皆様、ぜひお声を聞かせていただいて、地域の中でみんなで考えられるような取り組みを今後も目指していくべきかなと、今日パネリストの皆さんのお話を聞いて思ったんですけれども、林さん、最後にご意見いただけますでしょうか。

林 皆さん、長時間ありがとうございました。まとめということで。

今日もパネリストの皆さんからもいろいろなご提言などもありましたし、本当に一人ひとりが考えていくことで、地域というのはどんどん変われる可能性があると思いますし、私たち当事者もぜひ皆さんのお力もお借りしたいですし、一緒にいろいろなことをやっていきたいと思っていますので、ぜひ皆で手を携えてやっていけたらというふうに今日改めて思いました。ありがとうございます。

葛山 ありがとうございます。パネリストの方々、本当に貴重なお話をありがとうございました。これでシンポジウムを終わらせていただきます。